



孝明天皇から 下賜された茵しとね ～辻精磁社の至宝～



今年のNHK大河ドラマは「篤姫」です。これは宮尾登美子さんが著した小説「天璋院篤姫」をドラマ化したものです。時代は幕末。異国船の襲来が相次ぎ、開国を迫る中、世情は混沌とし、薩摩藩主島津斉彬の養女からさらに公家の養女となって徳川將軍家へ嫁いだ女性の波乱に満ちた一生を描いています。

これにちなんで、東京都の江戸東京博物館では特別展「天璋院篤姫」展が2月19日(火)～4月6日(火)まで開催されています。その出品作品の一つに「白綸子地 菅牡丹唐草文縁錦茵」があります。

実はこの作品によく似たものが有田町にもあります。それは上幸平地区の辻精磁社に所蔵され、孝明天皇(在位1846～66)から下賜されたものです。大きさは81cm四方で、刺繍で施された文様は「天璋院篤姫」展のものとは多少異なります。下賜された際の入れ物で、表面に「御茵」と墨書された木箱おしとねもあります。他に同じく孝明天皇から下賜された紫宸殿図の軸物ししんでんずもあり、長い歴史を持つ窯元です。

辻家は安永3年(1774)に朝廷から常陸大掾源朝臣愛常の官命を賜っています。禁裏御用、いわゆる天皇家の御用を有田皿山で初めて拝命した窯で、文化11年(1814)の記録によれば、当時泉山の市助と九兵衛も禁裏御用の品を焼いていましたが、今に続くのは辻家だけです。官位を授与されたのは「辻家時代書」によれば六代目辻喜平次の時にあたります。

官位を得て直接宮中へ御用品を納めることになった辻喜平次は、京都に取り次ぎ所を置くことを佐賀藩に申請しています。印章も記載され、それには「肥前松浦郡有田住 禁裏御用陶器師 源朝臣 辻常陸大掾」の文字があります。

最近、新しく発見された「成富作兵衛代官日記」にも、辻家のことがたびたび記載されています。文化年間のものと思われる日記の中に、上京(当時は京都)するにあたっての許可を求めたものがあり、日数150日限

りの往来切手が許可されています。おそ

辻家所蔵の茵

らく、禁裏御用の件で上京したと思われませんが、その内容についてはよくわかりません。

辻家はその後も禁裏御用をつとめますが、明治8年に合本組織香蘭社が設立されるにあたって、当時の当主・辻勝蔵はそのメンバーの一人に加わっています。11歳年の離れた勝蔵の姉セイは八代深川栄左衛門に嫁ぎ、辻家と深川家は姻戚関係を結びます。

両家の縁組では辻家が所有していた柞灰の販売権利をセイの持参金代わりに渡したといわれていますが、他の資料によれば、嘉永6年(1853)に大樽の酒造家川原善之助と共に七代深川栄左衛門(忠顕)が佐賀藩の国産方から一手販売権を得て、白川の代官所脇にあった灰方役に保管し、売り渡したとあります。

いずれにしても、この柞灰もまた薩摩藩とは密接な関係を持っています。焼物作りの工程の一つ、釉薬の原料となる柞灰は柞の木の皮を燃やして、その灰を使いますが(詳細は館報No.56参照)、当初、日向産の柞が品質がよく、後に日向産のものが減少するのに代わって薩摩藩のものが増えていきました。深川栄左衛門から藩へ提出された記録には、柞灰仕入れのため、慶応2年(1866)に金3,500両の貸し付けを依頼したものがあります。この多額の金額が佐賀藩と薩摩藩を結びつけていたともいえるかと思えます。

その後、佐賀藩と薩摩藩は「薩長土肥」の一員として、幕末から明治の日本をリードしていくわけですが、意外と身近に、禁裏や薩摩藩などとのつながりを持つ有田皿山です。(尾崎葉子)

茵：畳などの上に敷いた綿入の敷物。表は唐綾もしくはは固織物などに広さ4～5寸の赤地錦の縁(へり)を四方にさし回し、裏は濃打絹などを用いた。

皿 季刊 山

No.77

春
2008

有田町歴史民俗資料館・館報

発掘調査が語る

広瀬向窯跡の歴史

やきものの町有田には、その400年の窯業の歴史を物語る数々の遺跡が残されています。その代表格は、何と云っても丘陵斜面に築かれた大規模な登り窯跡で、これまでに66ヶ所も発見されています。これは窯の築かれた場所の数で、一ヶ所でいくつもの窯が発見されることも多いため、窯本体の数としては軽く100基を超えます。

今回はその中から、平成15年度より県道の建設計画に伴い継続調査を実施している広瀬向窯跡について、いくつかの調査成果をご紹介します。

広瀬向窯跡は、有田駅から北北西方向に約3km、車ならおよそ10分ほどの広瀬山地区に位置しています。北側に対峙する丘陵には香茸窯跡(こうたけかまあと：1640～50年代)や茂右衛門窯跡(もえもんかまあと：18世紀後半～近代)などが残っており、東に隣接して磁器の原料を産出する龍門磁石場などもあります。

ところで、広瀬向窯跡と言えば、“辰砂”(しんしゃ：酸化銅を呈色材として赤く発色させる描画・施釉方法)の製品をイメージする方も少なくないと思います。昭和37年11月、全国の骨董業界や愛陶家の間に激震が走りました。「ニセ初期伊万里九州から大量に流れる」という見出しの新聞記事が掲載され、みんなが疑心暗鬼に陥り、業界が大きな混乱に見舞われてしまったからです。実は、その震源となったのが、広瀬向窯跡で私的に掘り出された数々の陶片で、特に辰砂製品は、当時まだほとんどその存在が知られておらず高値で取引されたため、大量の贖物流出の引きがねとなったのです。こうして不本意な経緯ながら一躍全国にその名を知られるようになった窯跡でしたが、意外にも“辰砂の広瀬”のイメージばかりで、その後も長い間謎の多い窯場跡でした。

しかし、昭和60年度の九州陶磁文化館による試掘調査を皮切りに、平成8・9年、14年の西有田町教育委員会による試掘調査などを経て計6基の窯体が発見され、徐々にその実態が明らかになってきました。そして、いよいよ今回ご紹介する平成15年度からの発掘調査です。西有田町教育委員会によって17年度まで年度ごとに継続調査してきたもので、有田町との合併により、18年度からは新町の教育委員会が事業を引き継いでいます。

6基の窯体のうち、道路建設予定範囲と重なるのは



1) 広瀬山地区の景観(南東から)
窯跡は、写真中央より左下にかけて位置している



2) 3号窯跡(北から)
奥の2室の右側の天井付近がよく残っている

1～3号・6号窯跡の4基で、それぞれ丘陵斜面を北から南へと登っています。残る4・5号窯跡については、これまでわずかな面積しか調査されておらず、確実な操業時期や他窯との関係等もよく分かっていません。ちなみに、これら各窯の名称は発見順の番号で、6号窯跡(1640～50年代)、1号窯跡(1650～60年代)、3号窯跡(18世紀前半～後半)、2号窯跡(18世紀後半～20世紀初頭)と、順次造りかえられたことが判明しています。

ところで、この窯場跡が平成16年度以降マスコミなどにもたびたび取り上げられ、辰砂騒動以来の脚光を浴びたことは、まだ記憶に新しいところです。発端は、3号窯跡を発掘したところ、一部の焼成室は天井付近までしっかりと残っているなど、驚くほど保存状

態が良かったからです。250年以上もの時を経た構築物が、立体的な姿を止めたまま、突如として目の前に現れたのです。

一般的に廃棄された窯は、後の土地利用のため破壊し整地されたり、自然崩壊により朽ちてしまい、発掘調査の際には床面近くしか残っていないのが通例です。ところがこの窯の場合、どうやら廃棄直後に隣に築かれた2号窯跡の構築方法や位置関係が幸いして、破壊が最小限に止まったようです。というのも、西側に隣接する2号窯跡は、地面を2m以上も盛土して造られており、窯体の東側に沿って上り下りするための側道が設けられていました。3号窯本体の西寄りの部分は、まさにその側道の地面の直下に位置していたのです。加えて、新しい2号窯の焼成不良品がどんどん3号窯跡の部分に捨てられたことで、自然崩壊する前にすっかり土中に埋まってしまったのです。

調査では、ほかにちょっとマニアックな発見もありました。1号窯跡の物原層で、色絵用の素地がバラバラと出土したのです。1650年代頃の製品で、無文の白磁のほか、後から上絵を組み込むため染付文様の一部を抜いたものなどもあります。これに上絵付したものがいわゆる古九谷と称されるものです。色絵の技術は1640年代に完成し、17世紀頃にはまだ付加価値の高い高級品用の技術でした。これは旧有田町の窯跡では珍しくありませんが、旧西有田町の窯跡としては初めての発見です。当時はまだ上絵付工程が分業化されていない時期なので、この広瀬山の地で一時期上絵付まで行われていたことが分かります。しかも広瀬山は、これ以後急速に国内外向け量産品の生産にシフトしていくため、窯場の長い歴史の中でも色絵磁器が作られたのはこの時期に限られます。

1号窯跡で色絵素地が焼かれていた頃、合わせて、もう一つ特徴的な製品が生産されていました。辰砂です。実は、この1号窯跡こそが、独特な侘びた雰囲気を持つ広瀬の辰砂を焼成した窯だったのです。ところが、辰砂騒動の際の私掘では100点以上も出たと云われていますが、今回の調査は大々的であったにも関わらず、せいぜい数十点ほどしか出土しなかったのです。しかも、出土地点はごく狭い範囲に限られており、集中的に廃棄されていたことが分かりました。これは、つまり特定の焼成室に限って、短い期間だけ窯詰めされたことを意味しています。もう少し多くの焼成室での生産を予想していたためちょっと期待外れの感はありますが、客観的に真正銘本物の広瀬の辰砂と断じられる基準資料ができたことは、大きな前進と受け止めるべきでしょう。

本年度、平成19年度の調査をもって、一応、当初予定していた現地調査はすべて完了しました。4・5号窯跡の位置付けなどまだまだ解明できない謎の多い窯場跡ですが、これまでの出土資料の精細な整理作業を通じて、今後一つでも多くの謎を解き明かせればと思っています。

(村上伸之)



4) 色絵素地変形皿 (外面)
色絵は、素地に上絵付後、再度低温焼成して完成



5) 辰砂草花文鉢 (内面)
出土辰砂製品の大半は瓶類だが、その他の器種も少量出土



3) 1号窯跡 (北から)
調査区内では、7つの焼成室が発見された

未来に伝える文化遺産 〈有田町の文化財〉紹介

かんばら

蒲原コレクション



ありし日の蒲原権さん

現在、町内の佐賀県立九州陶磁文化館に常設展示中の蒲原コレクションは、昭和51年に有田町名誉町民の故蒲原権さんかんばらはかるから有田町に寄贈された101点の古伊万里です。

蒲原さんは明治29年、赤絵町に生まれ、長崎高商（現在の長崎大学）を卒業後、三井物産に入社しました。その折、上司の家に招待された蒲原さんは大きなショックを受けました。それは古美術商の娘を妻に持つ上司が、蒲原さんが有田出身ということで、自慢の品を並べてどんな感想が聞けるかと楽しみにしていたら、全くといっていいほど無関心だったことに、「有田出身のくせにこの素晴らしい工芸品に何の関心も持たないのか。君には郷土愛というものがないのか。」と怒りだしたからです。

それからというもの、休みになると上司と一緒に古美術店巡りをし、それに関する書籍を読み漁り、時には贗物をつかまされたりして次第に目を肥やしていきました。

その後、終戦後に有田へ戻った蒲原さんは佐世保市で会社を経営する傍ら、県内でも早い時期に設置された有田町文化財保護審議委員会の委員、委員長を歴任し、天狗谷、掛の谷、猿川、山辺田の各古窯跡の発掘調査に尽力しました。そして長年の夢であった国際陶芸美術館を有田に開設するために、昭和49年にヨーロッパに渡り、アムステルダム、パリ、ロンドンなどの骨董店を駆け回って100点余の古伊万里を買い付けました。そのために投じた私財は2億とも3億ともいわれます。その姿を見た作家角田房子さんは、蒲原さんを「ほんとうの愛郷者、愛国者」と評しました。

昭和55年9月、有田町はその功績を称え、名誉町民の称号を贈りましたが、昭和62年3月14日に91年の生涯を終えられました。

新刊紹介



当館ではこのほど左記に紹介した「欧州貴族を魅了した 古伊万里 蒲原コレクション」の図録を発行しました。

蒲原さんについては前述の通りですが、昭和

53年に開館した有田町歴史民俗資料館は、当初この蒲原コレクションを展示していました。それにあわせて図録も出版しましたが、当時はカラーで掲載する作品の数も少なく、長い間図録そのものが絶版となっていましたし、九州陶磁文化館を訪れる方からも図録の出版を希望する声があがっていました。

そこで、蒲原さんの郷土に対する熱い思いを、再度町民のみなさまにお伝えするためにも、図録の出版を計画しました。

今回の出版にあたり、九州陶磁文化館の大橋康二館長をはじめ、学芸課の鈴田由紀夫、宮原香苗、宇治章、藤原友子の各学芸員のみなさまには多忙の中を、101点の作品の解説や論考をいただきました。改めて御礼申し上げます。

この図録を手には、九州陶磁文化館の常設展示室に出かけませんか。蒲原コレクションの数々は江戸時代の有田皿山の技と気概を示して、きっと元気を与えてくれるものと思います。

- ・書名
「欧州貴族を魅了した
古伊万里 蒲原コレクション」
 - ・A4版 108頁
 - ・価格 1,500円
 - ・販売場所 有田町歴史民俗資料館（泉山）
九州陶磁文化館（戸杓）
- ※詳細は当館（☎43-2678）にお問い合わせ下さい。

季刊『皿山』

通巻77号（平成20年3月1日）
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185